

11月中旬の週末だった。そういえば、この秋は、まだ、ゆっくりと紅葉を見ていなかったことに気がついた。さて、どこに行こうか。

11月1日に、福島民友新聞の「随想」欄に「文知摺観音」というタイトルでエッセイを載せた。数日後、職場に電話がきた。文知摺観音の入り口にある普門院の〇〇さんだという。ご住職のお母様ということだった。民友新聞を読んでくださったとのことで、いたく感動していただいたらしかった。私はというと、わざわざご丁寧に、お電話をいただいたことに感激することになった。

文知摺観音に行き、直接、お礼を言いたくなかった。そういうわけで、出かけることにした。この日は、穏やかな晴天に恵まれた。風がなく、寒くもない絶好の紅葉日和だった。ただ、見頃が過ぎてしまっていることはわかっていた。1週前がベストだった。

駐車場に着いた。車がいっぱいだった。予想以上に人が多かった。ここで、考えた。もしかしたら、民友新聞を読み、来てくださった方もいるかもしれない。そうであれば、ちょっとうれしい。

入り口のイチョウは見頃を過ぎていた。中へと進むと、モミジは綺麗なのだが、見頃のピークではないことは明らかだった。それでも、十分に紅葉を味わうことができた。

この前、文章に書いた場所だと思うと、また格別の味わいがあった。人がどんどん入っていく建物があった。「床もみじ」である。綺麗なモミジが、ピカピカに磨かれた床に映る。借景である。窓から見えるモミジを絵画のように美しく切り取ることができる。次から次へと、写真を撮る人が絶えることはない。

文知摺観音と言われている敷地を一通り巡った。普門院がどこなのかがわからない。社務所で聞いてみた。すると、どうやら近くに安洞院があり、そちらにいらっしゃるとのことだった。案内された方向に歩き出した。程なくして、安洞院600M先という案内板が見えた。意外と遠かった。駐車場に戻り、車で行くことにした。

やっぱり車にしてよかった。すぐ近くではなかった。安洞院は、立派なお寺だった。普門院・文知摺観音とは対照的な趣だった。人がおらず静かだった。こちらにも綺麗なモミジがあった。ちょうど見頃だった。

案内所らしき建物にお邪魔した。事の経緯を説明した。すると、ご住職と奥様が来てくださった。お電話をくださったお母様には会うことは叶わなかった。突然の訪問にもかかわらず、ご住職が我々を案内してくださった。

床もみじは、若葉の季節には、床若葉になることを知った。絵葉書になった写真も見せていただいた。もみじとは違った味わいがあった。樹齢450年にもなる、しだれ桜のことも教えていただいた。安洞院は、お寺さんなのだが、桜や若葉の季節、そして秋の紅葉シーズンには、穴場的存在になることを知った。

高台にあるため、福島盆地を一望することができた。西側から福島盆地を見ることには慣れている。一方、東側からとなると、あまり見る機会がない。それだけに新鮮だった。急な訪問だというのに、とても親切にしていただいた。かえって恐縮してしまった。

この日、文知摺観音を訪れた人たちは、みな穏やかな表情をしているように見えた。まさしく錦秋である。紅葉日和の、こんな穏やかな一日があつてもよいと思えた。安洞院の皆様のおかげで、そう思うことができた。